

右近

世阿弥作

季は	地は	シテ	ツレ	シテ	ワキ	前
三月	京都	桜葉の神	侍女	貴女	鹿島の神職	
						後

「四方の山風のどかなる。く。雲井の春ぞ久しき。

詞 「そもそも是は鹿島の神職何某とは我事なり。われ

此度都に上り。洛陽の名花残りなく一見仕りて候。また北野右近の馬場の花。今をさかりなるよし承り候ふあひだ。今日は右近の馬場の花をながめばやと存じ候。

道行 「雲の行く。そなたやしるべ桜がり。く。雨は降りきぬ同じくは。ぬるとも花の陰ならば。いざや

宿らん松かげの。ゆくへも見ゆる梢より。北野の森もちかづくや。右近の馬場に着きにけり。く。

詞 「急ぎ候ふ程に。是は早右近の馬場に着きて候。あれを見れば花見の人々と見えて。車をならべ輿をつゞけ。まことにおもしろう候。しばらくやすらひ花をながめばやと存じ候。

「春風桃李花の開くるとき。人の心も花やかに。あくがれいづる都の空。げにのどかなる時とかや。

シテ、ツレ一声
「見渡せば。柳桜をこきまぜて。錦をかざる花車。

シテ
「くる春ごとにさそはるゝ。

二人 「心もながき気色かな。

下歌地 「花見車の八重一重。見えて桜の色々に。

上歌
「ひをりせし。右近の馬場の木のまより。く。か
げも匂ふや朝日寺の。春のひかりも天満てる。神
の御幸のあとふりて。松も木高き梅がえの。立枝
も見えて紅の。初花車めぐる日の。轆や北につゞ
木陰に車立てよせけり。

くらん。く。

ワキ 「のどかなる頃は弥生の花見とて。右近の馬場の並

木の桜の。陰ふむ道にやすらへば。

シテ 「げにや遙に人家を見て。花あれば即入るなれば。

木陰に車立てよせけり。

ワキ詞
「むかひを見れば女車の。所からなる昔語。思ひぞ
いづる右近の馬場の。ひをりの日にはあらねども。
見ずもあらず。見もせぬ人の恋しくは。あやなく

今日やながめくらさん。是れ業平の此所にて。女

車をよみし歌。今更おもひいでられたり。

シテ

「あらおもしろの口ずさみや。右近の馬場のひをりの日。むかひに立てる女車の。所からなる昔語。はづかしながら今はまた。我身の上に業平の。何かあやなく分きていはん。思ひのみこそしるべなりしを。

ワキ 「左様にながめし言の葉の。其旧跡もこゝなれば。

今までかやうに事問ふ人も。いつ馴れもせぬ人なれども。

シテ

「たゞ花ゆゑに北野の杜にて。

ワキ

「言葉をかはせば。

シテ

「見ずもあらず。

地

「見もせぬ人や花の友。く。知るも知らぬも花の陰に。相宿りして諸人の。いつしか馴れて花車の。榻立てゝ木のもとに。下りるていざやながめん。

げにや花のもとに。帰らん事をわするゝは。美景
によりて花心。馴れくそめてながめん。いざい
ざ馴れてながめん。百千鳥。花になれゆくあだし
身は。はかなき程に羨まれて。上の空の心なれや。
上の空の心なれ。

ロンギ地

「げに名にしおふ神垣や。北野の春も時めける。神
の名所かずくに。

シテ
「ながむれば。都の空のはるぐと。霞み渡るや北

野宮居。御覽ぜよ時をえて。花桜葉の宮所。

地
「花の濃染の色分けて。紅梅殿や老松の。

シテ
「緑より明けそめて。一夜松も見えたり。

地
「日影の空も茜さす。

シテ
「紫野行きしめ野ゆき。

地
「野守は見ずや君が袖。ふるき御幸の物見とて。車
も立つや御輿岡。是ぞ此神の御旅居の。右近の馬
場わたり。神幸ぞたつとかりける。

ワキ詞

「あらありがたの御事や。かくしも委しく語り給ふ。社々の御本地を。なほく教へおはしませ。

シテ詞

「まことは我は此神の。末社とあらはれ君が代を。守りの神と思ふべし。

ワキ

「よくく聞けば有難や。守りの神とはさてくいづれの靈神にて。かやうにあらはれ給ふらん。

シテ

「あらはづかしや神ぞとは。あさまには何と岩代の。地

「待つこと有りや有明の。く。月も曇らぬ久方の。

天照神にては。桜の宮と顯はれ。こゝに北野の桜葉の。神とゆふべの空晴れて。月の夜神樂を待ち給へと。花に隠れ失せにけりや。花に隠れ失せにけり。(中入)

ワキ歌

「げに今とも神の代の。く。誓ひは尽きぬしるしとて。神と君との御恵み。誠なりけり有難や。く。

後ジテ
「天皇の賢き御代を守るなる。右近の馬場の春を得

て。花上苑に明にして。軽軒九陌の塵に交る神心。

和光の影も曇なき。君の威光も影高く。花もゆる
がず治まる風も。のどかなる代のめでたさよ。

地「曇りなき天照神の恵みを受けては。桜の宮居とあ
らはれ給ひ。

シテ「こゝに北野の神の宮居に。

地「花桜葉の神とあらはれ。曇らぬ威光を顯衣の。袖
もかざしの花盛。 (中の舞)

地「月も照りそふ花の袖。く。雪をめぐらす神かぐ
らの。手の舞足ぶみ拍子をそろへ。声すみわたる
雲の棧。花に戯れ枝にむすぼゝれ。かざしも花の
糸桜。 (破の舞)

シテ「治まる都の花盛。

地「治まる都の花盛。東南西北も音せぬ浪の。花も色
添ふ北野の春の。御池の水に御影をうつし。うつ
しうつろふ桜衣の。裏吹きかへす梢にあがり。枝

に木伝ふ花鳥の。とぶさにかけり雲につたひ。遙
かにあがるや雲の羽風。遙かにあがるや雲の羽風
に。神はあがらせ給ひけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹著